

第12章 1. ウィーン体制 b. ウィーン体制の動揺

⑥[1 **ラテンアメリカ**] (中南米)の独立運動(←[2 **スペイン**], ポルトガル植民地)

1804[3 **ハイティ**] (フランス植民地)で黒人共和国成立(指導者[4 **トゥサン=ルヴェルトユール**])

→以後、クリオーリヨ(5 **植民地生れの白人** [6 **大地主**])を担い手とする独立運動が活発化

[7 **シモン=ボリバル**] →ベネズエラ・[8 **コロンビア**]・ボリビアなどの独立を指導

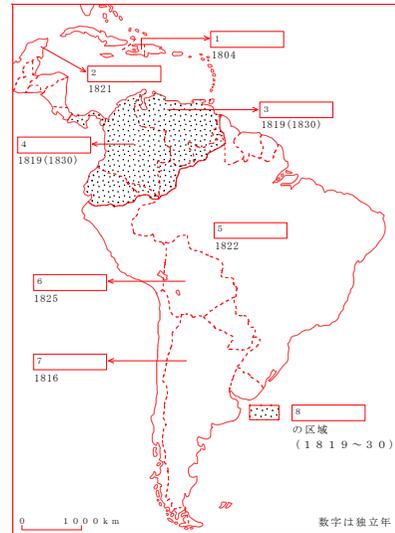
[9 **サン=マルティン**] →[10 **アルゼンチン**]・チリ・ペルーの独立を指導

メキシコ…[11 **イダルゴ**]の蜂起をきっかけに独立を達成



・メッテルニヒ…ウィーン体制維持のため、干渉をめざす

[12 **イギリス**] (カニング外相)の支持
アメリカ合衆国[13 **モンロー教書**] (1823)による牽制 → 独立達成



ラテンアメリカの独立 数字は独立年

モンロー教書(宣言)…[14 **アメリカ合衆国**]第5代大統領モンローが[15 **ウィーン体制**]勢力の[16 **ラテンアメリカ**]独立運動への介入を牽制しようとして出した宣言(文書)。[17 **アメリカ大陸**]とヨーロッパの[18 **相互不干渉**]を唱え、ラテンアメリカへの介入を牽制しようとした。合衆国の伝統的なモンロー主義とよばれる[19 **孤立**]主義外交をとるきっかけとされる。なおこの教書の背景にはラテンアメリカを合衆国の[20 **勢力圏**]にしようとする意図もあったとされる。



④[21 **ギリシア**]での独立運動の高まり → [22 **バイロン**]らロマン主義者の参加
[23 **ロシア**]・フランス・[24 **イギリス**]の支持 → 1829 独立を達成

ロマン主義…個人の[25 **感情**]や[26 **想像力**]を重んじ、民族の[27 **自覚**]や[28 **伝統**]を尊重する考え。規則と調和を重視する 18 世紀の[29 **古典**]主義に変わって 19 世紀前半、とくに[30 **ドイツ**]でさかんとなった。[31 **ウィーン**]体制下における自由やナショナリズムへの抑圧や[32 **市民**]の台頭を背景としている。一方では[33 **民族**]を美化する伝統主義につながったが、他方では

[34 **自由**]への願望や社会変革への夢をも含んでいた。
文学では[35 **グリム**]兄弟によるドイツの伝説の収集、革命詩人と呼ばれたドイツ[36 **ハイネ**]、イギリスの詩人[37 **バイロン**]、絵画ではフランスの[38 **ドラクロワ**]が、音楽では[39 **シューベルト**]やショパンが代表とされる。

ウィーン体制の下、自由主義やナショナリズムの立場に立つ運動はつぎつぎ弾圧された。しかし大西洋を隔てた[40 **ラテンアメリカ**]では、トゥサン=ルヴェルトユールの指導の下黒人共和国[41 **ハイティ**]がフランスから独立して以来、[42 **シモン=ボリバル**]や[43 **サン=マルティン**]らを指導者に、[44 **クリオーリヨ**]とよばれる植民地出身の白人を担い手とした独立運動がつづいた。これにたいし、[45 **メッテルニヒ**]らウィーン体制の指導者は介入をはかろうとしたが、[46 **アメリカ合衆国**]がアメリカ大陸とヨーロッパの相互不干渉を唱えた[47 **モンロー教書**]をだし、さらにウィーン体制から離脱をすすめる[48 **イギリス**]も反対したこともあって断念、この地に多くの独立国が生まれた。
またイスラム教国である[49 **オスマン帝国**]の支配下にあった[50 **ギリシア**]でも独立運動が発生、独立運動を支援したバイロンら[51 **ロマン**]主義者の働きかけもあって、ウィーン体制側の足並みが乱れた 1830 年には独立が実現するなど、しだいにウィーン体制側のゆるみも見え始めた。

c. フランス 7 月革命とその影響

①ナポレオン後のフランス=[52 **ブルボン**]朝の復活(王[53 **ルイ18世**] [54 **シャルル10世**])
厳しい[55 **制限**]選挙制度ながら[56 **立憲君主**]制の形をとる=革命の既成事実を承認。
↓
[57 **貴族**]・聖職者を重視、亡命貴族に補償金支出、[58 **アルジェリア**]遠征、議会解散など実施 → 自由主義派の反発 未召集のまま

②[59 **1830**]年[60 **フランス七月革命**]発生
シャルル10世を追い、自由主義者の[61 **ルイ=フィリップ**]を王に迎える
([62 **七月**]王政=オルレアン王朝成立)

③影響[63 **ベルギー**]、オランダからの独立
[64 **ポーランド**] (←ショパン「革命」を作曲)・イタリア(カルボナリ運動)でも独立運動発生。
イギリスの自由主義改革にも影響を与える → 第一次[65 **選挙法改正**]実現

[66 **1830**]年、フランスで[67 **七月**]革命が発生、絶対主義への復帰をめざすブルボン朝の[68 **シャルル10世**]は国外の亡命、かわって大資本家の支持をうけた[69 **ルイ=フィリップ**]が王維について[70 **七月**]王政(オルレアン朝)が成立した。この影響で、[71 **ベルギー**]がオランダから独立したほか、[72 **ポーランド**]やイタリアなどでも独立運動が発生、イギリスでも第一次[73 **選挙法改正**]が実現した。